

三一新書 416

われら高校生

上 田 平 雄 著



三 一 書

上 田 平 雄
うえ だ ひら お

京都大学法学部卒業

現 在 兵庫県立八鹿高校教諭

著 書 『ハイ・ティーン』(三一新書) その他

現住所 兵庫県豊岡市高屋

われら高校生

定価 250 円

1964 年 2 月 8 日 第1版発行

著 者 © 上 田 平 雄
1964 年

発 行 者 竹 村 一

印 刷 所 暁印刷株式会社

製 本 所 永 井 製 本 所

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台2の9

電 話 東 京 (201) 9 5 8 1 ~ 5 番

振 替 東 京 8 4 1 6 0 番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

三一新書 416

われら高校生

上田平雄著

三一書房

目次

第一章	青い梢……………	五
第二章	反主流派……………	三
第三章	渦潮……………	七
第四章	親と子と教師……………	七
第五章	灰色の集団……………	二三
第六章	秋燃え……………	二四
第七章	学校祭……………	二五
第八章	嵐……………	一九
第九章	ほのお……………	二四

第一章 青い梢

一

「おーい、早よう集まってくれよ、みんなダラダラしとったら、時間がなくなってしまうぞ……」
昨日、始業式が終わったばかりの、四月十日の午後である。

編成がえて、新しく三年六組に入った五十名の生徒は、その最初のホームルームを、コーラスですごそうと、これも昨日きまっただばかりの委員長高階伸夫の提案で、ここ、八木高校からほど近い、八木川のほとりに集った。

ところが、みんなは、三々五々、川原に腰をおろして、おたがいにしやべりあったり、石ころを拾って川の向うに投げあったり、中にはすもうをとったりして、高階伸夫が声をからして叫んでも、それをまじめに聞こ

うとしないのであった。

「チェッ、いやんなるなあ……おい、みんな集まってくれよ……」

高階伸夫は、ふたたび大きな声でどなった。そして今度はそばに立っている、副委員長の植田幸子に向い、

「おい、何とかしてくれよ、こんなじゃ、いつまでたっても、コースでけへんが……」
と嘆願するように言った。

「本当にみんな、どんなつもりかしらん……」

植田幸子は眉をひそめて、みんなを見ていたが、

「よし、うちがみんなを集めてくる」

と言って、高階のそばを離れ、みんなを集めにかかった。やっと、みんなが、高階、植田、それに今日のコースを担当する中岡五郎のまわりに集まったのは、それから十数分ののちであった。

みんなが集まったところで、高階伸夫がちよっとてれながら、みんなを見廻して口を開いた。

「あのう……ぼくたち、ふしぎな縁で、高校最後の学年を、いっしょのクラスになりました。みんな仲よくやっていききたいと思います。」

あのう……それから、今年はぼくたちにとって、大事な年です。進学や就職の、きまっていくな年ですから……いろいろと悩みや苦しみがありますが、みんなで助けあっていききたいと思います……」

高階伸夫というのは、ずばぬけて、勉強ができ、つねに全校一の成績を保持している、京大志望の生徒であった。しかし、彼は秀才にありがちな冷たさや、高慢さはみじんもなく、どこかに人を惹きつける、ふしぎなあたたかさをもっていた。

彼の人柄は、みんなの前で話をするときにも如実にあらわれる。けっして上手な話しぶりではない。にもかかわらず、彼のはなしぶりの中には説得力があった。

みんなは、やっと静かになって、高階の言葉に耳を傾けた。

「それで、今日はこのクラスの、記念すべきスタートの日なので、みんなで、いっしょにコーラスをやらうと、集まったのです。思いきり歌って下さい……」

高階伸夫がそういつてペコリと頭を下げると、

「よっしゃ、まかしとき！」

「なんでもうたったるぞ」

など、みんなの間から声が飛んだ。高階伸夫にかわって、今日のコーラスをうけもつことになった中岡五郎が、みんなの前に進み出た。

「あのう……歌集をひろげて下さい。十三頁。しあわせのうたから歌います」

そういつて彼は最初の節をうたい始めた。みんなはそれにあわせてうたい出した。高い女生徒の声に、太い男生徒の声がまじって、それはふぞろいな合唱であった。それに始めのうちはテンポもまちまちで、しばらくは、混乱状態が起こったりした。

しかし、しあわせのうたが終って、カチューシャ、ステンカラージンなどが次々にうたいつがれるころには、ようやく、みんなの調子がそろうようになった。

三年六組の担任、原孝も、生徒にまじって、歌集をみつめていた。原孝は二十八歳の独身の教師、教科は社会科をうけもっている。しばらく組合活動に従事して、担任は久しぶりなのだが、それだけに、彼の意気どみ

は大きかった。

クラスの一人一人がなんでも話しあえるクラス。苦しみやなやみは、おたがいが助けあっていくようなクラス。一人一人の学力が増進し、みんなが志望している進路に進んでいけるようなクラス。そして、秩序と規律のある集団。そのようなクラスを作りたいというのが、彼の目標であった。

原孝は、歌集から目を離して、みんなを見渡した。川原いっぱいにひろがって、思い思いの姿勢で歌っている五十名。足を投げ出してうたっている女生徒や、隣りの者と肩を組んで、体をゆすりながらうたっている女生徒。それに、さっきから、歌など少しもうたわないで、石ころをひろっては八木川に向って、それを投げている男生徒など。

そのどの顔にも早春のやわらかい陽が照って、いかにも明るく輝いているように見えた。原孝は、大きく息を吸い込んで、今度は八木川のはるか向うに連なっている、中国山脈の山なみに目をうつした。春とはいっても山陰地方の、とくに日本海から奥地へ入っているこの高原地帯では、遠い山々のいただきに、まだ白いものが残っていた。

その遠い山々の、谷あいの水をあつめて流れている八木川の流域は、見渡すかぎり、なたねやれんげに彩られ、その間に点在する小さな民家のあたりには、緋色のぼけや椿が、長い冬からやっと解放された安らぎを見せていた。

「あのう……これで、今日、予定したうたはみんなすんだんです……」

原孝は、中岡五郎の声でやっとわれにかえった。

「でも……まだ時間が少しありますから、何か希望曲があったら言って下さい……あのう、リクエスト曲は

ありませんか？」

中岡五郎はニコニコしながら、みんなを見渡した。

「よっしゃ、赤いハンカチをやれ」

「高校三年生！」

「学園広場だ」

みんなはめいめいの希望曲を言いあつた。それは、みんな流行の歌謡曲であつた。

その声にまじって、後の方から、

「八高の数えうたをやれ！」

と大きな声でとなりつけるものがいた。その声があまり大きかったのと、そのうたが思いがけなかったの
で、みんなは一瞬あっけにとられた風であつた。が、やがてゲラゲラ笑い出し、「うん、賛成だ」と言い出す
ものさえあらわれた。中岡五郎はそれをきくと、いかにも当惑したようすで、

「今日は、ホームルームの時間やから、そんなの……困るぞ……」

八高数えうたというのは、八木高校教師のニックネームを一節ずつ歌にしたものである。中岡五郎が困った
表情でオロオロしているのを見ると、そのうたを言い出した河島邦夫という生徒が、おもしろがつてつめよつ
た。

「おい、なぜ困るんや、ちっとも困れへんど、歌ったらあかんいうなら、その理由を言えよ」

「でもう……」

中岡五郎は、どうしてよいのか判らぬ様子で、とうとう隣りにいる高階伸夫に応援を頼んだ。

「おい、河島、常識で考えてくれよ、君もまさか本気で言ってるんじゃないやろ、別の曲をリクエストしてくれや」

「あほういえ、本気でいっとるんやど、ホームルームの時間に歌ったらかんいう理由はないんやで」

河島邦夫がおどけた恰好でいうと、さすがに高階もそれに答えられないで、頭をかかえこんでしまった。高階たちが困っている様子がおかしかったので、みんなの中に、ひとしきりはげしい笑いがまき起こった。さつきから高階たちのやりとりをながめていた原孝も、底意のない彼等の笑い顔に、体中が暖くなるような気持ちをおぼえていた。

ところが、このときである。

全く突然、今までの和やかな雰囲気はずたずたに引きさくような声で、一人の男生徒が叫んだ。

「バカヤロー！ そんな固くるしいコーラスならやめちまえ！」

それは今までうしろの方において、みんなのコーラスにあわせようとせず、石ころを拾っては川に投げつけていた生徒であった。

「河島がリクエストした曲をなぜうたわんのや？」

みんなは一瞬、おびえたようにその生徒を見た。背は高いとは言えないが、体はガッシリしまっている。スポーツできたえたらしい強靱さが見えるが、どことなしに、暗いかげがうかがえる。無雑作にのびした髪の下に、濃い眉がせまっている。

中岡五郎はそう言われて、何か言おうとしたが、その生徒のはげしい憎悪にみちた目にぶつかって、一言も言えず、そこに突っ立たきりだった。

「おい、早ようやらんか！ リクエストしろといったから河島が言ったんや。お前ら、えらそぶると承知せえへんど！」

その生徒は、今度はクラス全体に挑戦でもするようになり、そのガラガラする目をみんなに向けた。河島邦夫は、その生徒の目にぶつつかるとあわてて視線をはずした。冗談半分でいった自分のリクエストが、このような結果になるうとは予想もしていなかったのである。

「竹野、いい加減にしてくれや」

たまりかねたように、委員長の高階伸夫が言った。

竹野と言われたその生徒は、高階の言葉に反射的に身構え、何か言おうとした。が、何を考えたのか、今までの態度をガラリとかえて、

「そうかい、よし、それならいい加減にしてやろう。おれはもうかえるぞ、コーラスなんて退屈でしょうがねえ」

そう言いすてると、みんなに背を向け、校舎の方に向って歩き出した。すると、今まで、彼のそばにいて、いっしょに石をいじっていた二、三人の生徒が、まるで言いあわしたように、竹野のあとを追って走り出した。

全く一瞬のできごとだったので、残りの生徒たちは呆氣にとられて、彼等を見送っていた。が、やがて、今までの雰囲気とはうってかわって、冷たいそうぞうしさが、みんなを包んでしまった。委員長の高階は、いかにも苦しそうに表情を歪めて、それらを見ていたが、何を思ったのか、突然、彼等の新しい担任、原孝に近寄って来た。

「先生、何か、歌って下さい」

「え？」

「先生、どんなうたでもええからうたって下さい、先生はぼくたちの担任やから、一つぐらい歌ってくれてもええ」

「ぼくが？」

思いがけない申し出にびっくりして、原孝は高階の顔を見た。彼の申し出を断わるつもりであった。しかし、高階の必死といえるほどの目の色を見ているうちに、歌わずにはいられない気持になった。高階は、竹野が去ったあとの、收拾のつかない雰囲気を担当が歌うことによって回復しようとしているに違いないのであった。原孝がうたうということは、全く予期していなかったことだけに、その場の雰囲気を一変させた。

「待ってましたあ、ガラスのジョニー」

「頼んまつせ」

原孝は、去年の学校祭のとき、職員演劇の中で、アイ・ジョージのヒットソング、ガラスのジョニーをうたったことがある。みんなはそれを言ってるのだ。

原孝は頭をかきながら、

「よし、じゃあ、うたうよ」

そういつて歌い出した。アイ・ジョージとは似ても似つかない声であったが、それでも、それを聞いた生徒たちは、手をたたいてよろこんだ。

「うまいぞ」

「セキシ・ボイス」

「アンコール」

さまざまな声がとんだが、高階は、原孝の歌が終ると、ニコリして、みんなに言った。

「うんでも、もう時間だし、校歌をうたって今日の会を終ったら……」

「そうや、校歌をうたおう」

やっとなれにかえったように、中岡五郎が言った。みんなは声をはり上げて校歌をうたった。校歌をうたい終ったとき、ちょうど、校舎から、ホームルームのおわりを告げるミュージック・サイレンが鳴りひびいた。川原いっばいにひろがっていた生徒たちは、それぞれ校舎の方に向かって歩き出した。

「先生、ワリカシイカスぜ、低音がすばらしいんや」

原孝が歩き出そうとすると、さつき八高数え歌を言い出した河島邦夫たち二、三人が彼のまわりに集まって来た。

「冗談じゃない」

原孝がさすがにれてそういうと、

「みんなマダムキラーだって言ってるで」

「セキシ・ムードだって、先生の声。女の子にもてるで」

みんなは口々に言って、ゆかいそうに笑った。

「先生、それより、今年はたのしくやってくれよ、あんまり勉強の方やかましく言うなよ、おれたち勉強の方だよわいんやから」

「進学するヤツは勉強せんならんけど、おれたち、就職するんやから、せめて今年はうんと遊びたいんや」

「就職したら、年中、休みなしにこきつかわれるんだものな」

そのとき、さつきコーラスから離れて校舎の方へ行ってしまった竹野たちが、校舎から出てくるのが見えた。それを見ると、河島たちはあわてて、原孝のそばを離れた。

原孝をみとめた竹野は、ちょっとにらみつけるように、彼に冷たい視線を送ったが、すぐもとの無表情にかえって、グランドの方に走っていった。原孝が職員室に入ると、今度は、委員長の高階伸夫、副委員長の植田幸子、クラス選出の生徒会代議員の田中博允、クラス会計の平山頼信の四人が、原孝を追いかけてやって来た。

「先生、今日は、急場を助けてもらっておおきに」

高階が頭をかきながら言った。

「うん、突然、おれにうたわすんだから」

原孝は、ちょっと高階をにらんで、それから声をあげて笑った。

「先生、びっくりしんさった？ 竹野って生徒」

植田幸子がきいた。

「……………」

「竹野さんて、いつもあんな調子やわ、うちのクラス、あんな人がいるんで、先が思いやられるわ」

「……………」

「うちら、まさか、あんな人がうちのクラスに入ってくるとは思わなかったんよ、ねえ、あの人、二年生の

とき、下級生をなぐって停学になったこと、先生、知っとんさるわなあ。これから先、何するか判らへんわ」
植田幸子はさも心配そうに言った。担任を遠ざかっていたために、原孝は、竹野という生徒については何一つ知らなかった。いや、竹野だけでなく、今度、自分のクラスに入った五十人のすべてについて、その成績から家庭状況、素行などについては殆んど知らない。

「先生は、最初の時間、このクラスはよいクラスにしたい、と言っとんさったけど、少し、しっかりしてもらわんとあけへんで」

今度は田中博允が言った。原孝がびっくりして田中をふり向くと、田中は真剣な顔付をして、

「今日でも、あんなときには、先生の方から叱ってもらわんと困るんや」

「え？」

「そりゃ、ぼくたち役員も、何とかええクラスにしたいと思うとるで、それでも、あいつだけには齒が立たへん」

「先生、あいつは親分なんやで、子分十人ばかりもつとるんや。うちの学校だけやなしに、隣の米山高校にも、照日高校にも……」

「なに？ 親分？」

原孝は親分という言葉をきいて、さすがにびっくりした。あまりにも学園に似つかわしくない言葉である。

「今日、あいつが帰ったら、二、三人、あいつのあとから行ったやろ、香住、浜坂らや、あいつらはみんな竹野の子分やで」

「そやから、うちの手に負えへんの、先生から、ガンと叱ってもらわんと。先生は叱る義務があると思う